神奈川県立図書館の「尾崎文庫」コレクション

石尾　久美子

はじめに

神奈川県立図書館にはいくつものコレクション資料があるが、その中にはPRが不十分なため、せっかくの資料が活用されていないものもある。かながわ資料室で所管する「尾崎文庫」もその一つである。

尾崎文庫はかながわ資料室の前身である文化資料館の発行した目録、『文化資料館資料目録　図書の部　第１集　「尾崎文庫目録」①』[1)]、『同　第２集「尾崎文庫目録」②』[2)]、によりコレクションの内容を把握できる。①には昭和20年から昭和40年代にかけての現代作家による歌集を、②には歌集以外の短歌関係の図書・雑誌・新聞、一般図書・雑誌、そして尾崎孝子氏自身に関する資料を収録した。

このコレクションの全体像と図書・雑誌から何点かを紹介したい。

1　尾崎文庫とは

「尾崎文庫」は、歌人の尾崎孝子氏（以下敬称略）旧蔵の昭和20年から昭和40年代にかけての現代作家による歌集・短歌関係の図書・雑誌・新聞および尾崎氏に関する資料等、合わせて2万8000点におよぶ資料群である。

『神奈川県史　別編１　人物篇』[3)]には遺贈とあり、『神奈川県立図書館・音楽堂４０年のあゆみ』[4)]によれば県立図書館（当時は文化資料館）でのコレクション創設は1973（昭和48）年となっている。

『個人文庫事典　Ⅰ　北海道・東北・関東編』[5)]には生前蔵書の公開を希望していた故人の意思を受け、尾崎強氏より寄贈を受けたとの記述がある。

これらの資料はかながわ資料室の書庫で利用を待っている。

2　尾崎孝子について

尾崎孝子（おざき、こうこ）は本名カウ。1897（明治 30）年 3 月 25 日福島県生まれ。以下に略歴を記す。

1919（大正８）年　尾崎保正と結婚。

1921（大正 10）年　台湾に渡り、『あらたま』同人。

1927（昭和２）年　帰国後『ポトナム』『橄欖』（かんらん）の同人となり吉植庄亮に師事。
同年夫と死別。

1928（昭和３）年　再び台湾に渡ったが、同年帰国。

1931（昭和６）年　東京で『歌壇新報』を主宰。

1943（昭和 18）年　逗子に転居。

1947（昭和 22）年　『新日光』を主宰。

1949（昭和 24）年　逗子町町会議員に当選し、1954（昭和 29）年まで在職。

1954（昭和 29）年　鎌倉に転居。

1970（昭和 45）年４月 22 日歿す。享年 72 才。墓所は鎌倉霊園。

本名、生年月日、略歴は主に『神奈川県史　別編１　人物篇』[3)]に拠った。

当館所蔵の歌集に『花のいのち』＜請求記号 K92. 4/48＞、『草木と共に』＜同 K92. 4/22＞、『歴程』＜同 K92. 32/2＞、『女心秘抄』＜同 K92. 4/114＞など、他に創作自伝『流水記』＜同 K97. 4/36＞、随筆集『萬華鏡』＜同 K98. 4/78＞がある。

『歴程』は凡そ 1953（昭和 28）年、1948（昭和 23）年から 1949（昭和 24）年、戦前戦後に作った歌を集めている。配列は制作の順序によらず作者の好みに従って編集されている。自身のあとがきに「『歴程』の中の作品は、尾崎孝子の作品であり顔であり全體です。」と記述している。

『女心秘抄』は 1950（昭和 25）年から 1952（昭和 27）の三年間に出来た作品を制作の順序にはよらずに配した歌集。『歌壇新報』第 227 号（1953（昭和 28）年 3 月 25 日）で同郷の歌人黒須忠一は「街の議員をやってゐられる

だけあって、社会を見てゐる目が、新鮮でもあり切実である」「いわゆる普通の云う甘い女心を脱ぎすてて厳しい女の姿を表はしてゐるが実はそこからふかくゆたかな女心にまで達している」と評している。

『流水記』は尾崎孝子の創作自伝。香子という主人公の少女時代から台湾時代、竜吉という伴侶との死別までが描かれている。

『歌壇新報』第405号（1968（昭和43）年5月25日）から「序章」が、412号（同年12月）から第1章が掲載開始となった。この連載の終了後は「行雲記」と題する姉妹篇が掲載され始めていたが、尾崎の死により２回までの連載となった。

『萬華鏡』は『歌壇新報』他の刊行物に書き綴った随筆を集めている。歌人として、歌壇ジャーナリストとして、そして町会議員として多彩な変化を見せる尾崎孝子が浮かび上がってくる。

この中には「菜の花忌に偲う前田夕暮」と題した文章も収録する。この中で尾崎孝子は『歌壇新報』と夕暮について書いている。

3　尾崎文庫の図書

このコレクションは、歌集、短歌雑誌、短歌関係その他の図書、原稿、歌稿、書簡に大別できる。

その中で中枢をなすのが、昭和20年代から40年代前半にかけて刊行された現代歌人集約2,680点である。

この内個人歌集が約2,240点、結社や短歌会による歌集が約390点、出版社などによる合同歌集が約50点、所蔵されている。

個人歌集の中には、尾崎孝子の『南天燭』、『歴程』を始め、彼女が師事した吉植庄亮の歌集が、『開墾』、『くさはら』、『霜ぶすま』、『寂光』、『寂光（再版）』、『大陸巡遊吟』、『風景』など７点所蔵されている。

吉植庄亮は1884（明治17）年千葉県印旛郡本埜村に生まれる。政友会の代

議士の長男として生まれた庄亮は東京帝国大卒業後中央新聞の記者となる。1906（明治 39）年に金子薫園に師事して歌人となり 1922（大正 11）年『橄欖』を創刊する。同年、反アララギの『日光』に北原白秋、前田夕暮と行動をともにして参画。歌壇の第一線に立った。

1925（大正 14）年から 10 年間で印旛沼の開墾事業を完成させ、1936（昭和 11）年から衆議院議員を務める。

処女歌集『寂光』は 1921（大正 10）年の刊行、繊細で閑寂な詠風が特色である。

代表的歌集『開墾』は 1941（昭和 16）年刊行、ライフワークであった開墾事業と農耕生活に拠ったもので、全巻を通じて土の歌人としての独自性を示している。

『霜ぶすま』は 74 歳で亡くなる 1958（昭和 33）年の刊行である。「一年間の収穫を終へた後の田が深々と霜をかぶつて眠つてゐる姿をみて名づけた」という歌集は、開墾の完了を歌い、生活の様々を歌い、老いを歌った、最後の歌集にふさわしいものである。

『寂光』

『開墾』

『霜ぶすま』

また、神奈川ゆかりの歌人としては、秦野市出身の前田夕暮の歌集を２点、『耕土』と『夕暮遺歌集』とを所蔵する。

前田夕暮は 1883（明治 16）年 7 月 27 日、大住郡南矢名村（現・秦野市）の豪農の家に生まれる。1898（明治 31）年、中郡共立学校（現・神奈川県立秦野高等学校）に進学するも、翌年の夏から休学、のちに退学してしまう。1902（明治 35）年頃より「夕暮」の号を名乗り、文学に目覚め投稿を開始する。1904

（明治 37）年 2 月には『横浜貿易新聞』に短歌を投稿し、その作品「清狂」（一）～（五）は 40 首に及び、２月９日から 20 日にかけて５回掲載された。

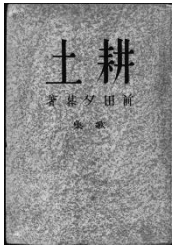
1904（明治 37）年、22 歳で上京し尾上柴舟に入門、1910（明治 43）年処女歌集『収穫』を出版する。同じ頃『別離』を出した若山牧水と共に自然主義の代表歌人として注目された。その後自由律歌集『水源地帯』の刊行、定型歌への復帰、などと作風を変えながらも精力的に作歌活動をする傍ら、短歌雑誌『詩歌』を刊行、途中休刊と復刊を経て亡くなる直前まで編集に携わる。『詩歌』については後述する。

太平洋戦争中は大日本文学報国会短歌部会幹事長を務めた。1945（昭和 20）年４月から翌年 12 月まで奥秩父入川谷に疎開し自然順応の生活を送る。

1951（昭和 26）年４月 20 日荻窪の白日社にて、結核性脳膜炎のため 69 歳で亡くなった[6)]。

『耕土』は、1946（昭和 21）年７月に刊行された夕暮の第 12 歌集で、奥秩父入川谷での疎開の歌 450 首を収める。

『夕暮遺歌集』は長男の歌人前田透の編集により、没後の 1951（昭和 26）年９月に刊行された歌集である。遺詠「わが死に顔」を含む、戦後の未発表歌 479 首を収める。



『耕土』

『夕暮遺歌集』

他の所蔵歌集の一例を挙げれば、「アララギ」の斎藤茂吉の『浅流』、『萬軍』や土屋文明の『韮菁集』などが目を引く。

『アララギ』は伊藤左千夫が蕨真を編集発行人として 1908（明治 41）年 10 月『阿羅々木』として創刊した。主要会員は左千夫・古泉千樫・蕨真・茂吉・石原純・島木赤彦等で、第三号より中村憲吉・長塚節・土屋文明が加わる。翌

年の第二巻より左千夫が編集発行人となり『アララギ』として発行する。『アララギ』は万葉集を尊び、写生短歌を基本とする[7]。

茂吉は左千夫、千樫から短歌雑誌『アララギ』を引き継ぎ、正岡子規が説いた万葉基調の客観写生に加えて生命の真実を歌い込むべきだという、独自の短歌理論を展開した。歌集に『赤光』『あらたま』『つきかげ』などがある。

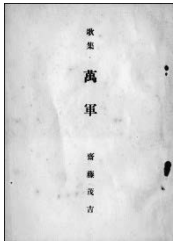
『浅流』（せんりゅう）は『萬軍』（ばんぐん）の発行が終戦によって中止された埋め合わせに刊行された歌集である。戦争末期茂吉自らが選出した『萬軍』の原稿は、出版社八雲書店に送られたものの終戦により刊行が取りやめになった。しかし茂吉には既に原稿料が前渡しで出されていた事情から、代わりの歌集として出版することになったのが『浅流』であった。

『萬軍』は茂吉自らが選出した戦時下の作品集となるべき歌集であった。しかし、尾崎文庫で所蔵している『萬軍』は謄写版刷で奥付もなく、出版社も出版年も不明である。この他に『萬軍』には紅書房から 1988（昭和 63）年に刊行されているものがある。

土屋文明は茂吉から『アララギ』を引き継ぎ、現実の生活の直接的表現を「生活即短歌」として説いた。歌集に『ふゆくさ』『山下水』などがある。

『韮菁集』（かいせいしゅう）は陸軍省報道部臨時嘱託の資格で戦地視察の旅に出かけた、1944（昭和 19）年 7 月より 12 月までの中国大陸旅行詠よりなる歌集である。

『浅流』



『萬軍』

『韮菁集』

4　尾崎文庫の雑誌

短歌雑誌のコレクションは 755 タイトルを数える。この中で、尾崎孝子が主

宰した『新日光』については後述する。ここでは、尾崎が同人となった『あらたま』『ポトナム』『橄欖』を例に少し述べたい。

『あらたま』は日本統治下の台湾において日本語で刊行された短歌雑誌である。1922（大正 11）年 11 月に短歌結社「あらたま短歌会」により創刊された。

「あらたま短歌会」は濱口正雄、樋詰正治、国枝龍一らによって結成され歌会を定期的に持つようになっていた。しかし台湾ではまだ短歌はブームになっていない段階で、尾崎孝子の入会もまだであった。台湾での短歌運動は 1923（大正 12）年に歌人の平井二郎が台湾に渡り、短歌批評「年刊歌集を読む」を『台湾日日新報』に連載したことで大きな刺激を受けた。「あらたま短歌会」は平井という強力な人材を同人に迎え、尾崎孝子もまた「年刊歌集を読む」に啓発されて「あらたま短歌会」の同人となり平井の指導を受けるようになった。

『あらたま』の終刊は 1945（昭和 20）年 4 月で、戦局の激化に伴う休刊という形だった。

尾崎文庫では 1944（昭和 19）年 10 月号の第 23 巻 10 号（通巻 260 号）から 1945（昭和 20）年 3 月号の第 24 巻 3 号（通巻 266 号）を所蔵している。

『ポトナム』は 1922（大正 11）年 4 月、当時の京城（現、ソウル）にて創刊。京城で女学校の教師をしていた小泉苳三や百瀬千尋等によってヤナギ（白楊）を意味する『ポトナム』と名付けた。主宰は小泉苳三。1944（昭和 19）年の雑誌統合令により『アララギ』と合併したが、戦後は 1947（昭和 22）年 1 月『くさふぢ』の誌名で復刊。1951（昭和 26）年『ポトナム』に復元した。2009（平成 17）年 8 月号で 1 千号を数え、現在まで続く短歌雑誌である[7)]。

尾崎文庫での所蔵は 1951（昭和 26）年の 28 巻 1 号（通巻 299 号）から 1970（昭和 45）年の 47 巻 10 月号（通巻 534 号）だが、30 巻 10 号（通巻 332 号）が欠号になっている。

『橄欖』は 1922（大正 11）年 9 月、吉植庄亮主宰により創刊。吉植は金子

薫園の白菊会に加盟していたが、1921（大正10）年歌集『寂光』を出版して一躍歌壇に認められ、翌年独立して『橄欖』を主宰発行することになった。太平洋戦争中の歌誌統合により、数誌と合併し、金子薫園を迎えて『光』と改題して発行したが、1945（昭和20）年に休刊となり、『光』は事実上解体した。1946（昭和21）年12月に『橄欖』復刊号を出している[8]。

尾崎文庫での所蔵は1943（昭和18）年の22巻、1947（昭和22）年の26巻２号から1970（昭和45）年の49巻８号だが、欠号が多い。

5　『新日光』と『歌壇新報』

ともに尾崎孝子が編集発行を務めた短歌雑誌と短歌新聞だが、これについて論じられたものは少ない。ここでは『日本近代文学大事典』[9]の記述を引用する。

『新日光』については、「短歌雑誌。1947（昭和22）年４月～1970（昭和45）３月。全62冊。季刊。編集者尾崎孝子。尾崎は「歌壇新報」の編集発行人でもあった。アンデパンダン形式で新人層の作品を多く載せ、『現代女流作品特集』『私の随筆特集』『新日本農民歌特集』など興味ある企劃を試みた。本誌は同人組織でも結社制でもなく、維持会員を募りそれを主体に運営されていたが、尾崎逝去のため「歌壇新報」とともに廃刊した。」[10]

尾崎文庫では、1947（昭和22）年の創刊号から1970（昭和45）年３月の第62集を所蔵するが、28集を欠いている。

なお62集の巻末「新日光の言葉」には、「このまま休刊することはあるまいと思われます」と尾崎自身が綴っていたが、結局これが終刊となった。

『歌壇新報』は「短歌新聞。昭和６・８～４５・６。「短歌月刊」の付録として創刊し、第２号から独立した月刊新聞となり短歌新報社発行としたが、実質は短歌月刊社の経営。７年３月からは短歌月刊社から離れて尾崎孝子が経営、

編集に当たる。当初は四六四ツ切判 20 ページが標準、戦後は月刊タブロイド判４ページ前後、穏健な編集で、歌論、歌壇ニュース、新刊紹介、時評などを主とした。尾崎の死去によって廃刊。」[11)]

尾崎文庫では 1934（昭和９）年１月の 30 号を始めとして終刊号の 1970（昭和 45）年６月の 429・430 号までを所蔵しているが、途中欠号が多い。

終刊号では４月に亡くなった尾崎への追悼文が多数掲載されている。

6　前田夕暮の『詩歌』

前田夕暮は 1906（明治 39）年 10 月若山牧水、三木露風らと白日社を起こし、1907（明治 40）年１月『向日葵』が創刊されたが、これは同年２月、二号で廃刊となり、白日社も事実上解消した。その後夕暮は 1910（明治 43）年６月、白日社復活を宣言し、社友を募って二百数十名の参加を得た。そして 1911（明治 44）年４月、復活白日社の機関誌として『詩歌』が創刊された。

『詩歌』は第一期が 1918（大正７）年 10 月の通巻 92 号で一旦廃刊となるまで、歌壇に多くの新人を輩出したほか萩原朔太郎、室生犀星などの活躍の舞台ともなった。

『詩歌』の第二期は、1928（昭和３）年４月から戦時中の休刊を挟み、夕暮没後 1957（昭和 32）年５月の 37 巻１号（通巻 387 号）まで、その後 1967（昭和 42）年１月前田透が復刊（第三期）した 38 巻１号（通巻 389 号）の表紙には「復刊１号」の文字がある[6)]。

夕暮亡き後透に引き継がれた『詩歌』は、透の死により 1984 年６月の 55 巻６号（通巻 599 号）で終刊した。

尾崎文庫では 1944（昭和 19）年の 25 巻８号から 1970（昭和 45）年の 41 巻５号まで、数冊の欠号を除き所蔵している。1951（昭和 26）年９月の 31 巻６号は「前田夕暮追悼號」である。

7　『心の花』と『短歌人』

尾崎文庫の資料はＰＲ不足のためか余り利用が多くない。その中で、最近利用があった『心の花』と『短歌人』を紹介してみたい。

『心の花』は1898（明治31）年佐佐木信綱が創刊した現在まで続く短歌雑誌。短歌結社竹柏会の機関誌には1896（明治29）年に創刊した機関紙『いささ川』があったが、佐々木は1898（明治31）年１月にこれを廃刊し、２月から新雑誌の創刊に踏み切った。これは一結社の機関紙にとどまらない雑誌の必要性を重視した。『心の花』が掲げてきた作歌への信条は「広く、深く、おのがじしに」であり、佐々木は「歌材は広く探求せよ、表現は深玄であれ」と説き芸術はその人独自のみちであり、しかも人各々の道があると「おのがじし」の正しさを述べている[12)]。

尾崎文庫では1946（昭和21）年６月の572号から1970（昭和45）年７月の861号までを所蔵するが、欠号も多い。中には728号「信綱米寿」、736号「治綱追悼」、752号「竹柏園先生九十賀記念号」などの特集号を含む。

『短歌人』は1939（昭和14）年４月の創刊の月刊結社誌。佐佐木信綱主宰の『心の花』同人で「三々会」という研究会のメンバーでもあった鵜木保・小宮良太郎・木下立安らが斎藤瀏を主宰として発刊した。発行所は木下立安方。創刊号の出詠者は195名で全会員の作品がすべて一段に組まれた豪華なものであった。以降戦時下も発行を続けたが、用紙難や印刷所の焼失等により1945（昭和20）年５月休刊した。

戦後復刊号が出されたのは1946（昭和21）年４月、斎藤瀏の巻頭言を掲げ32頁、出詠者187名の再出発であった。

『短歌人』には取り立てて掲げるべき主義主張はない。創刊の経緯からも分かるように『短歌人』は『心の花』の継承誌である。斎藤瀏を主宰に据えてはいたが、「作家の主体性を互いに尊重する」という旗印を掲げての出発であった。この姿勢は斎藤瀏および木下立安没後の1954（昭和29）年１月会の運営

を会員より選出された 12 名の編集委員で行う「委員制運営方式」に改めたことに通じている。創刊を第一の出発、戦後を第二の出発とするならば、これは『短歌人』の第三の出発と呼ぶべきものであり、歌壇の歴史に残る新しいスタートとなった[13)]。

尾崎文庫では 1946（昭和 21）年の第８巻３号から 1970（昭和 45）年の第 32 巻６号までを所蔵するが欠号も多い。

おわりに

短歌は明治以降それまでの和歌と称された伝統的な形式から、近代の新しい思想に基づき自由な形式の近代短歌へと変貌を遂げた。近代短歌の歌人たちはいくつかの結社に属していたり、歌人同士の師弟関係や交友関係など、いわゆる「歌壇」といわれるものを作り出していた。

今回本稿では歌壇ジャーナリストであった尾崎孝子の旧蔵資料である「尾崎文庫」の中から、尾崎孝子に関係する雑誌と郷土の歌人前田夕暮とを中心に取り上げて紹介した。これは尾崎文庫に収蔵されているごく一部である。しかし文庫内には、昭和のある時期の有名無名の歌人による歌集や様々な志を持ったあまたの結社の刊行物が集結している。これらの資料をつぶさに見ていけば、この時期の歌壇の状況や歌人のつながりなどが見て取れるかもしれない。

専門外のことゆえに力が及ばず、深く調査することもできなかったが、コレクションの紹介が利用の一助になることを願うと共に、その為のより一層のＰＲも必要と痛感する。

注、引用・参照文献

1)　神奈川県立文化資料館. 文化資料館資料目録　図書の部　第１集「尾崎文庫目録①」. 神奈川県立文化資料館. 1976.

2)　神奈川県立文化資料館. 文化資料館資料目録　図書の部　第２集「尾崎文庫目録②」. 神奈川県立文化資料館. 1980.

3)　神奈川県県民部県史編集室.神奈川県史;別編１　人物篇.神奈川県県民部県史編集室.1983, p196.

4)　“特別コレクション一覧”.　神奈川県立図書館. 神奈川県立図書館・音楽堂 40 年のあゆみ. 神奈川県立図書館・音楽堂, 1994, p. 53.

5)　日外アソシエーツ編集部. 個人文庫事典　1　（北海道・東北・関東編）. 日外アソシエーツ. 2005, p418～p419.

6)　前田透. 評伝前田夕暮. 桜楓社. 1979, p285～p312.

7)　十月会. 戦後短歌結社史・増補改訂版. 短歌新聞社. 1998, p303～p304.

8)　前掲 7), p77～p78.

9)　日本近代文学館編. 日本近代文学大事典. 講談社. 1977.

10)　前掲 9), p204.

11)　前掲 9), p53.

12)　前掲 7), p113～p114.

13)　前掲 7), p204～p205.

参照文献

・河原功. 日本統治期台湾文学集成 15　台湾随筆集一.　緑蔭書房. 2003.

・中島利郎. 日本統治期台湾文学小事典. 緑蔭書房. 2005.

・工藤幸一. 吉植庄亮の秀歌. 近代文藝社. 1991.

・前田夕暮. 前田夕暮全集　第２巻　歌集Ⅱ. 角川書店. 1972.

・前田夕暮. 前田夕暮全集　第５巻　詩・その他. 角川書店. 1973.

・斎藤光陽. 前田夕暮の研究. エスカ. 1994.

・山田吉郎. 前田夕暮研究　受容と創造. 風間書房. 2001.

・秋葉四郎. 茂吉幻の歌集『萬軍』戦争と斎藤茂吉. 岩波書店. 2012.

・清水房雄. 斎藤茂吉と土屋文明. 明治書院. 1999.

・近藤芳美. 土屋文明　近代短歌・人と作品１. 桜楓社. 1961.

・ ポトナム短歌会　http://www4.ocn.ne.jp/~potonamu/index.html
（参照 2013-10-17）.

・竹柏会心の花　http://kokoronohana.sakura.ne.jp/　（参照 2013-10-17）.

・短歌人　http://www.tankajin.com/index.html　（参照 2013-10-17）.